

開発援助と人類学

開発援助における語り分析とフェミニスト・エスノグラフィーの可能性

「ミパワメント語る事例に」

藤掛洋子

●はじめに

世界人口六六億人のうち、一日一ドル以下で暮らす人々は約一二億と試算され、その内の七〇％は女性であるという（参考文献⑧）。開発援助の現場、そしてGAD (Gender and Development) 研究では、貧困の女性化(Feminization of Poverty)が、重要な用語の一つとなってきた。しかしながら、「貧困の女性たち」の状況は多様である。貧困概念もまた、当該地域の人々の性別・階層・階級・民族など、異なる社会的属性を持つ当事者たちにより異なり、さらに、個人の貧困に対する価値観も複層的である。国際協力に関わるものは、開発援助が展開する当該地域の人々の社会における位置づけを見極めると同時に、女性のみならず、開発援助の裨益者となる当事者たちの価値観や日常実践を尊重しながら支援を行うことが不可欠であろう。

日常実践や交渉(negotiation)などに関する研究は、開発援助研究の中でもその重要性が認識されてきており、例えばエージェンシー(行為主体性)を鍵概念におき、住民

女性を対象にエンパワメントを可視化することなどが始まっている(参考文献⑦)。

文化人類学では、コロンビアリズムの終焉とポストコロナル人類学の流れの中で、語り分析の重要性やフェミニスト・エスノグラフィー(FE)の課題と可能性について議論されてきた。開発援助の現場においても「ターゲットグループ」とされる人々を他者化せずに描き出し、なんらかの形で開発政策に反映させる方法の一つとして、語り分析やFEの視点が有効ではないだろうかと考える。

●人類学における語り分析とフェミニスト・エスノグラフィー

一九六〇年代の大きな思想の転換期において、対象社会で生起する現象を丁寧調べることから新たな秩序や理論が生まれるという認識が広まってきた。一九七〇年代以降の、ギアーツ(Geertz)による解釈学的視点やブルデュー(Bourdieu)の実践理論等の流れが影響し、客観的社会現象だけではなく、行為者から見た社会を分析する必要性が指摘されてきたのである(参

参考文献⑩、⑪)。これらの流れを受け、「語り」や「ディスコース」(言説)の概念にも変容がもたらされてきた。

アブルゴットは、女性の日常実践と多様な抵抗形態を分析するには、人々の日常の①「語り」と実践を見ていくこと(discourse and practice)②歴史的状况、グローバルな状況への視点(connections)③特定の個人に焦点をあてること(ethnographies of the particular) (参考文献⑩)が有効であるというが、これは社会開発事業にも有効な視座であろう。

「語り」分析全般について言えることであるが、「データ」として分析対象となるのは、通常、研究者や実践家の耳に届く記号現象のみである。しかし、「住民参加型開発」という手法を採用しても、語られなかったこと、記録として残されていないものは通常、分析の対象とはなりにくい。柳田國男は日本を取り上げ、わが国には、まろい言葉(話し言葉)を話す人と、四角い言葉(支配者や知識人の用いる言葉)を話す人がいる、と言っている。これは、女性が一般的に丸い言葉を話す傾向にあるとい



開発援助と人類学

うことを指していると思われる。そのためフェミニスト（社会や文化に通底するジェンダーの政治性を明らかにしようとするフェミニズムの視点を持った人々や担い手）が、女性を対象に実施する調査に質的調査やライフヒストリー、FEを用いようとしたことは無理なからぬことであつた（参考文献④参照）。

FEとは、支配的な声と、それによつてかき消されがちな固有の体験に根ざす声を聴き分け、対象地域の人々の生活世界を記述するものである。FEの立場に立つ調査者は、自身の置かれるポジションや自身自身がインフォーマントになんらかの影響を与えていることをジェンダー視点から分析することが重要であろう。

ところで、FEの議論では、調査の過程自体を当該地域の女性のエンパワーメントに結びつけることができるような方策が模索されてきた（参考文献⑤、⑬）。しかし、当該地域の女性をエンパワーするための調査には、多大な時間とエネルギーが必要とされること、既成の学問世界の枠組みそのものがこの種の研究・調査を歓迎しないことなどの事情もあり、対象地域の女性たちのエンパワーメントに寄与するスタイルの調査を実施した例はあまりない（参考文献⑤）。このようなことから、FEは、ポストモダン人類学同様に、実践よりも単なる理念の追求に終わっていると、エンズリンは指摘する（参考文献⑬）。そして、なぜ現実

のインフォーマントをエンパワーするため
の「具体的な協力」を軽視するのだろうか
とエンズリンは問うている（参考文献⑬）。

開発援助の実践と研究双方においては、一九九〇年代以降、住民参加型開発が主流となる中、参与観察やインタビュー、フォーカスグループ・ディスカッション、PRA (Participatory Rural Appraisal)、PLA (Participatory Learning Action)、そして、これらにジェンダー視点加わった SEAGA (Socioeconomic and Gender Analysis) などの社会調査手法が精緻化されてきた（参考文献⑧）。これらの手法の一部にはFEの考え方が取り入れられているのではないかと考える。

しかし、住民の「語り」を拾う際、どこで、誰が、どのように聞かれるのか、そして、何が、どのように語られるのか、誰が沈黙するのか、沈黙させられるのか、といったことを深く解釈していくことは重要である。インタビューなどで語られなかったことは、ニーズ分析の際、「なかつたこと」とされることも多いが、沈黙には、戦略的な沈黙があつたり、構築されてきた意識の上において、沈黙を良しとする当事者が存在したりするため、「沈黙」の意味も多様である。そのため、当該地域で生きる人々を中心に据えた開発を行うならば、沈黙の意味をも含めて解釈する必要があると考える。

また、沈黙は、永遠のものではないかもしれない。筆者が開発実践者として関わっ

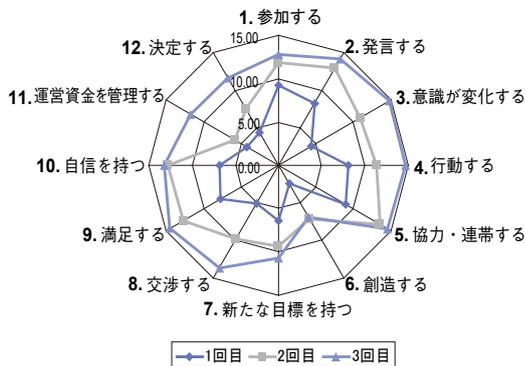
てきたパラグアイの農村女性の場合、一年から数年間、生活改善プロジェクトに関わつた後、それまで村社会においてはタブーと考えられてきた家族計画を口にできるようになったり、暴力の問題を社会に提示したりするなど、当事者が「沈黙」を破る瞬間もでてきた。開発実践に関わるものが、語られなかったことを存在しないものとして、当事者たちの「沈黙」を永遠のものとするのは、当事者たちの自らの体験を相対化するその過程を「沈黙」させてしまふ（参考文献⑨）ことにつながる。

筆者は、対象地域の人々の声を拾い、新しい社会を創造するためには、なんらかの政策につなげるためのツールが必要であると考える。これを、ポストフェミニスト・エスノグラフィー (POFE) と称したい。POFEとは、「人々の語りや実践を拾い上げ、社会を再構築しようとする人々の日常実践やエージェンシーを可視化し、政策策定に寄与することができるもの」と定義する。つまり、POFEは、理論と実践が接合されたものである。さらに、POFEでは、データを収集した研究者／調査者、実践者、そして書き手の葛藤も記述し、これらをも分析の対象とすることが重要であると考える（参考文献⑦、⑧）。

●POFEの立場に立ったエンパ ワメント評価モデル

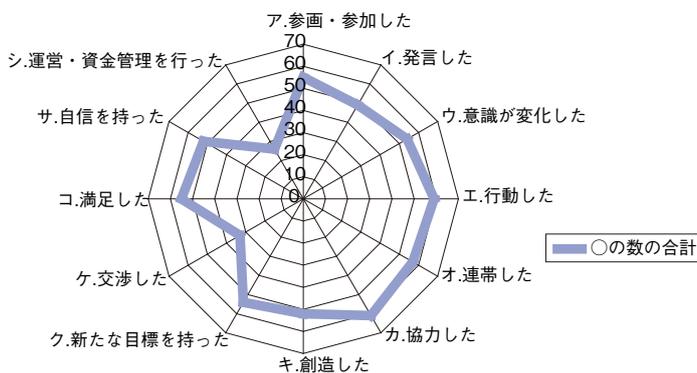
筆者は、パラグアイにおいて、貧困地区

図2 ホンジュラス国地方女性のための小規模起業支援プロジェクトエンパワーメント指標モニタリング結果(2004-2007年6月時点)



(出所) 参考文献⑥に記載されている藤掛モデルを用いプロジェクト作成(参考文献②、③、④、⑬)。

図1 S村の女性たちのグループとしてのエンパワーメント



(出所) 参考文献⑥、⑭、⑮。

に隣接するS村の女性たちがミクロレベルの生活改善プロジェクトを主体的に実施する過程で現れてきた個人やグループの意識や行動の変化を分析してきた(一九九三〜二〇〇六年)。同時に、それに呼応する形で生じてきた女性たちを取り囲む人々の意識の変化(パートナー、舅、姑、息子、娘、村外の人々)や社会・ジェンダー構造の再編の萌芽について分析してきた(参考文献⑦)。

S村の女性たちは、以前にはできなかった夫への交渉や、家計所得の管理、家族計画などを行うようになっていった。これらの一連のプロセスを分析したものがエンパワーメント評価モデル(通称、藤掛モデル)であり、その中の一つのツールが図1に示すエンパワーメント指標一二項目である(参考文献⑥、⑭、⑮)。パラグアイの生活改善プロジェクトの事後評価結果では、資金・運営管理が極端に低かった(図1参照)。

このモデルは、二〇〇三年一月より二〇〇八年一月まで独立行政法人国際協力機構によりホンジュラスの貧困地域で実施されている「地方女性のための小規模起業支援プロジェクト」のエンパワーメント評価モデルとしても用いられている(図2参照)(参考文献②、③、⑭、⑮)。

二回目のモニタリングでは、一回目のモニタリングよりも一二項目の全てのエンパワーメント指標がポイントを獲得しており、エンパワーメントの発現が高く認められた。しかし、就学の機会が十分になく、「ずっと家でトルティージャを焼いてきた」女性たちにとって、戦略的ニーズともいえる、運営・資金管理を行った(11)、意思決定を行った(12)、のポイントの上昇は、二回目のモニタリングでも低かった。この点はパラグアイの農村女性と共通する点であった。そこで、ホンジュラスにおいては、これらの評価データを分析の一つとして用い、その後のプロジェクトのフォローアップの方向性(グループの選定、研修内容など)を定めた。

三回目のモニタリングでは、一二指標のうち、特に「運営・資金管理する」の指標が大きな伸びをみせた(参考文献②)。これは、管理分野の研修が集中的に実施されたことにより、各メンバーの起業に対するオーナーシップの意識が強化されたからだと考えられる(参考文献②)。

パラグアイの農村において、当事者が生

きる社会の文脈に沿って女性の語りを拾い、文化人類学の手法を用い、それらを可視化することから生み出された藤掛モデルは、ホンジュラスのプロジェクトにおいて活用され、その評価結果がプロジェクトのフォローアップの方向性を決定することに寄与した。また、ホンジュラスの貧困削減政策への提言に寄与することとなった(参考文献⑭、⑮)。

●おわりに

国際社会では、貧困削減や「貧困の女性化」に対する取り組みの重要性が謳われて久しい。しかし、貧困の問題を政策に反映させるために、非現実的な被害者像を構築したり、悲劇のヒロインとして女性を表象せざるを得なくなっている(参考文献⑪)。また、ジェンダー主流化というアプローチは、分野横断的であることから、責任の所在が不明瞭になり、ジェンダー視点を取り入れたプロジェクトが展開されにくくなっている(参考文献⑫)。

一方、一九八〇年代以降、当事者の日常生活に注目し、そして、対象地域のジェンダー課題に考慮しながら開発実践を行う人々は増加していると思う。であるからこそ、筆者は開発援助の現場において、他者を他者化しないツールの開発と精緻化が必要であると考え。POFEの立場に立つ藤掛モデルは、当事者の声を可視化し、開発実践の中で活用され、国家の貧困削減



開発援助と人類学

政策になんらかの影響を与えることに寄与してきた。このモデルの一部は、アフガニスタンにおいては、女性の経済的エンパワメントに関するプロジェクトで活用されている（小林花氏の二〇〇八年一月七日の講義配布資料による）。

開発実践が展開する対象地域に生きる人々の多様性を捨象することなく、政策提言を行うことは容易ではないが、開発実践の現場と文化人類学、そしてGAD研究の間で蓄積されてきた知と経験を生かすことで、これらの課題に向き合うことができるのではないだろうかと考える。

（ふじかけ ようこ／東京家政学院大
学准教授）

《引用・参考文献リスト》

- ① 川橋範子「フェミニニストエスノグラフィーの限界と可能性―女による女についての女のための民族誌?」(『社会人類学年報』二三巻、一九九七年)。
- ② 黒田史穂子『専門家業務完了報告書』国際協力機構、二〇〇七年。
- ③ 国際協力機構社会開発部『ホンジュラス共和国地方女性のための小規模起業支援プロジェクト終了時評価報告書』国際協力機構、二〇〇六年。
- ④ 桜井厚「序 シェンターの語りと語り方」桜井厚編『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房、二〇〇三年。
- ⑤ 中谷文美「『女性』から『シェンター』へ、

そして『ポジシヨナリテイ』へ―フェミニスト人類学の系譜』岩波講座文化人類学 第四巻 個からする社会展望』岩波書店、一九九七年。

⑥ 藤掛洋子「プロジェクトが住民女性にもたらした質的変化の評価にむけて―パラグアイ共和国S村の住民女性が実施した生活改善プロジェクトの事例より」(『日本評価研究』第一巻第二号、二〇〇一年)。

⑦ 藤掛洋子『パラグアイにおけるカンペンシーナの主体構築過程に関する研究―研究／調査者と実践者の往還から見た開発協力』お茶の水女子大学大学院博士学位論文、二〇〇四年。

⑧ 藤掛洋子「質的評価」三好皓一編『評価論を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇七年。

⑨ 松木啓子「ナラティブアプローチの可能性と限界をめぐって―『異文化』理解の詩学と政治学」(『言語文化』第二巻第四号、一九九九年)。

⑩ Abu-Lughod, Lila, "Writing against Culture," in Richard G. Fox ed., *Recapturing Anthropology*, Santa Fe: School of American Research Press, 1991.

⑪ Cornwall, Andrea et al., "Introduction: Repositioning Feminism in Gender and Development," *Repositioning Feminisms in Development*, IDS Bulletin Vol.35, No.4, 2004.

⑫ Chant, Sylvia, *Gender, Generation and Poverty: Exploring the Feminization of Poverty in Africa, Asia and Latin America*, Edward Elgar Publishing Limited, UK, USA, 2007.

⑬ Enslin, Elizabeth, "Beyond Writing: Feminist Practice and the Limitations of Ethnography," *Cultural Anthropology*, 9(4), 1994.

⑭ Fujikake, Yoko, "Qualitative Evaluation: Evaluating People's Empowerment," *Japan Evaluation Society*, Vol.8(2), 2008.

⑮ Fujikake, Yoko and Kuroda, Shinoko, "Extracting an Empowerment Evaluation Model: A Paraguayan Case Study and Its Honduran Application," Keichi Kumagai et al eds., *Beyond the Difference: Repositioning Gender and Development in Asian and the Pacific Context*, Ochanomizu University, 2008.

⑯ Ortner, Sherry B., "Theory in Anthropology since the Sixties," *Comparative Studies in Society and History*, 26(1), 1984.

⑰ Ortner, Sherry B., "Resistance and the Problem of Ethnographic Refusal," *Comparative Studies in Society and History*, Vol.37(2), 1995.

⑱ World Bank, *World Development Indicators 2002*, 2002.